

令和4年度 第56回 中学生の「税についての作文」
まちだ納税貯蓄組合連合会優秀賞

「ウナギへの想い」

町田市立鶴川第二中学校 3学年 横野 悠輝

毎年12月の終わりになると僕の家にはウナギが届く。この時期になると冷凍庫はウナギでいっぱいになる。夏のアイス、冬のウナギというのが我が家の冷凍庫の役割である。実はウナギは父がふるさと納税をして、その返礼でもらうのだ。僕はウナギが好きなので、二千元と聞いた時は驚いた記憶がある。

しかし、ふるさと納税の仕組みも知らずにおいしく食べてたのが恥ずかしくなり、父に質問したり、インターネットで調べたりした。知ったことの中で一番印象深いのは、ふるさと納税には人々の想いを込めているということである。自分のふるさとがより良くなるために応援の想いを込めて税金を払う。災害などで痛手を受けた地域の復興を応援する想いを込めて税金を払うと分かった。父はどう思っているのか尋ねてみた。すると「ゆうきは知らなかっただろうけど、実は、ひいおばあちゃんには愛知県出身なんだ。お父さんも小学生の時に一度だけしか行ったことがないんだけどお寺の中に家があったね。まだ残ってるよ。親戚みんな遊びに行ってたね。とても楽しかったよ。トイレはかわやといって、家の外にあったんだけど、真夜中に行くのが真っ暗で怖くてね。今はどうなっているかわからないけど、頑張ってるよ」と思ってたね。「父は続けて、「あと、これは知っていると思うけど、ゆうきのお母さんは若い時に愛知から東京に出てきて仕事をがんばってるんだ。そういう意味でも愛知県を応援したいと思う気持ちには強くてね。」父の思い出を聞くのはうれいような恥ずかしいような、なんとも言えない不思議な気持ちがあったけど、ちゃんと父にも想いがあったということにほっとした。父も母もウナギを食べながら、その想いも味わっているのだろうと思う。

僕は東京で生まれて東京で育った。生まれてからずっと町田だ。大人になつたとき、東京都町田市は僕のふるさとということになる。町田市しか知らないの、ふるさとという感覚はまだないし、よくわからない。ふるさと納税での返礼品をインターネットで見たら、数は多くないけど、町田市の返礼品には、はちみつやリス園の招待券などがあるようだった。僕にとって愛知県は見知らぬ土地だが、将来、北海道や沖縄で仕事をするようになったら、きっと町田はふるさととして懐かしく思い出すのだと思う。その時に町田に納税をして「がんばれー」という気持ちになるのは理解できる気がした。そして、将来の自分のことを考えると、どのようなことを学び、どのような仕事をしているのだろうか、楽しく生きているだろうかなどさまざまなことを考えた。まだ自分は中学生だが十年後の自分に向けてもメールを送りたい気持ちがあふれてきた。こうして世代を超えてふるさとへの想いをつないでいくのだろうと思った。